聖杯戦争 the Parallel

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖杯戦争　ｔｈｅ　Ｐａｒａｌｌｅｌ

【Ｎコード】
Ｎ９２１５Ｕ

【作者名】
フリスタ

【あらすじ】
冬木市。そこは聖杯戦争が２度行われた土地だ。しかし、それもかなり昔の話で、今では魔術師などというものはいないに等しかった。しかし、今またこの土地で聖杯戦争が起ころうとしていた。

01（前書き）

作者の好きな作品。好きなキャラクター。それが混沌として行きます。
おかしなところはあると思います！
「え、それどーなのよ？」ってとこは教えて下さい。
でもある意味オールスターだから突っ込み切れないかも？
今回は初のオリジナル女性主人公。大変だー♪　大変だー♪
でも亀更新だー！　大変だー♪

では、聖杯戦争を始めましょうか。

01

都心から十数キロほど離れた山間部。都心から少し離れるだけで山だらけと言う舗装された道路を1台のバイクが走り抜けて行く。銀色のＸＲ２５０は高い音を奏で山を下って行く。しかし、その速さに疑問が残る。山道で下り、周りには対向車も追随して来るバイクも車もない。それにもかかわらず、ＸＲ２５０は最高速度を維持するかのように突っ走る。

「――――キャスターはもう召喚済みってわけね」

バイクのアクセルをフルスロットルで走らせる乗り手はフルフェイスの奥で驚きと苛立ちを混ぜ合わせた様な感情を舌打ちと共に吐き出す。そう、彼女は追われていた。道路ではなく脇に立ち並ぶ木々をバイクに引き離されない速さで飛び移っている存在に。

「魔導書ヲ渡セ」

純粋な人の声ではない。人の声を重複させた様な声だった。それはバイクを操る女性ではなく、バイクの荷台に括り付けられている荷物の中身を欲していた。そして、１００キロを超える速度で走って行く銀色のマシンはトンネルに入った。閉鎖された空洞を走り抜ける中、彼女の頭の中は”アレよりも速くトンネルを抜ける”という事だった。当然、抜けたところで相手がまだ後ろに張り付いている事に変わりはないが、最低でも現状維持をする事を考えていた。しかし、その考えは出口付近で崩れた。ソレはトンネルの出口で待っていたのだ。

「魔導書ヲ渡セ」

「魔導書ヲ渡セ」
「魔導書ヲ渡セ」

同じことしか言わない人形は増えて行く。彼女はバイクを急ブレーキで止めると反転しようとした。しかし、バイクはエンジンを止めて動かない。セルでもキックでも始動しないエンジンに彼女は苛立った。

「くっ！　このっボロバイク！　肝心な時に！！」

悪態をついてもバイクは動かない。彼女は荷物を抱えて後退る。そして、それはゆっくりと歩み寄って来る。致し方ないと思い彼女はヘルメットを脱いだ。荷物をバイク脇に置き、追い詰められたかと思われた彼女は皮のバイクグローブを深く握り込み、呪文を唱えた。

「Ｔｉｍｅ　ａｌｔｅｒ　――　ｄｏｕｂｌｅ　ａｃｃｅｌ！！」

それは彼女が倍速で動く魔術だった。――――かつて衛宮と言う魔術師の家系があった。何世代にも渡り研究を続けてきた大魔術、時系列の操作。戦術的用途は皆無だったそれを実戦闘用に改造させ使用した男がいた。もうかなり昔の話だ。衛宮と言う名前を話に聞いた事があるだけの彼女が、戦術用に使用したなどと言う事を知るわけも無い。しかし彼女はそれを使用した。

彼女の右手袋と右の長袖の間に覗かれる肌には青白い光が浮かんでいた。魔術刻印だ。魔力を込める手腕に刻まれている刻印が鈍く光っていた。

「ハァッ！」

バキャンッ！　ズシャンッ……カタカタカタ

人形は人形らしく、仲間がやられても意に介さず歩みを止めない。人形には、らしくも感情はないようだ。それもそのはず、十中八九キャスターのモノであろう人形達だ。ただ奪い、殺す為だけにいるのだろう。

「ぐぅっ……ハッ！」

ガキャッ！　ズシャンッ……

何体かの人形を拳で蹴りで撃ち倒した彼女は未だ増え続ける人形を前に膝をつく。倍速で動く代償は大きく、身体中は軋み悲鳴を上げていた。そして、彼女は決心する。仕方が無いと妥協する事にしたのだ。多少ながら霊脈も感じられる。こうなれば目的地でもここでも大差はない。そう思ったようだ。正直に言えば大差はある。だが、それも時と場合によって変わる。火事場の馬鹿力を出せる者もいれば、完全にコンディションを整えないと失敗に終わる者もいる。そして、どちらかで言うならば、彼女は前者だった。

彼女は荷物から古惚けた分厚い本と、召喚用の媒介を取り出す。バイクを背凭れにし、痛む体を立ち上がらせる。そして、彼女は目を閉じ一気にコンセントレーションをトップギアに変えた。

「――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

そして、魔導書に描かれている魔法陣が赤く光り出した。媒介が消え、そこには一人の青年が立っていた。

「挨拶は後よ！　貴方が何のサーヴァントかも知らないけど、貴方の力　今ここで見せなさい！」

無言で現れた男は、無言のまま人形達に向かって行った。

検事局。とある有名検事の下に大泥棒を名乗る女の子がやって来ていた。

「ミクモくん、今日は一体何しに来たのだろうか？」

【大江戸戦士トノサマン】の人形をマイクロファイバーの布で傷付かぬように磨いている男は御剣（ミツルギ）　怜侍（レイジ）。検事局きっての天才と言われ、数々の何事件の真実を暴いて来た男だ。

「最近テーマパークが出来たじゃないですか！　行きましょうよー

！」
「私は仕事中なのだが……」
人形を磨いているだけにしか見えないが、最近騒がれている『キラ事件』の情報を待っている彼を訪ねてきたのは一条（いちじょう）美雲（みくも）。正義の大泥棒【ヤタガラス】の2代目に成るべく修行の真っ最中の身だ。何故そんな大泥棒が検事の下にいるのかは逆転検事をプレイして欲しい。
「むむっ！　これは事件資料ですね？　っ！　御剣さん『キラ事件』担当してるんですか！？」
「私は検事だミクモくん。ただ興味があって個人的に調べているだけだ。それから勝手に資料を読まないで頂きたい。新聞記事だからまだいいが、警察資料なら逮捕しなければならない」
「大丈夫です！　その時は華麗に脱獄してみせます！」
「（捕まる様な事は避けないのか……）」
『キラ事件』とは、犯罪者ばかりが心臓麻痺で死亡すると言う事件だ。偶然で片付けるには大規模過ぎるその事件は関連性が無いようで、実はテレビや新聞で報道されている犯罪者だけが死んでいる事が一般にも知られるようになった。今ではその謎の死をインターネット上などで『Ｋｉｌｌｅｒ』＝『殺し屋』の意味から『キラ』と呼び、『神』と崇める者まで出始めていた。
御剣はそのキラ事件を意識し、資料を逐一確認していた。
「犯罪者がいなくなるなら良いんじゃないんですか？」
「犯罪者を裁くのが我々や法廷で無く、犯罪者であっては困るのだよ」
「なるほど、私も最近テレビの見過ぎでキラ寄りになってたみたいですね。確かにそれは許せませんね！　キラ事件の真実を盗みまし

ょう御剣さん！！」
「う、うむ。まだ事件と確定したわけでもないのだが……」
「じゃあテーマパーク行きましょう！！」
「今日は仕事だ……」

そして、別の日の休日を利用し御剣はミクモに付き合わされる羽目になった。

「今日もノコちゃんはいないんですか～？」
「刑事は刑事部長の大切な湯呑を割ってしまい休日返上で仕事中だ」
『ノコちゃん』とは糸鋸刑事（いとのこぎり）の事だ。こちらも逆転検事をプレイして分かって欲しい。

経営不振で倒産した【バンドーランド】そこの土地に新しく出来たのが【Ｓａｙ　Ｈｉ　ランド】だ。数多くのキャラクターにアトラクション、出店も多く揃えたテーマパークだ。少し目を放すとミクモはキャラクターと写真を撮ったりコースターに乗ったりしている。

「御剣さーん！　何してるんですかー！　次はこの部屋ですよー！」
「ま、待ちたまえミクモくんっ」

年齢差のある二人の体力にも差は大きく、御剣は何とか付いて行けているが、そろそろ限界が近い様だ。その時、御剣は重大な事件に巻き込まれて行った。

「ここは何ですかね～？」
「ここは関係者以外立ち入り禁止だ。どうやら着グルミ置場の様だ

な」

数々の着グルミが置いてある。先ほど見たキャラクターもいる事から着グルミのスペアと推測できる。

「おおっ！　奥の方に何かありそうですよ！」
「だから関係者以外は……やれやれ」
「キャーッ！」
「ムッ！　ミクモくん！？」

先を駆けて行ったミクモの悲鳴に、御剣は慌てて駆けだした。そこにはオカルトチックな図が地面に描かれており、図の真ん中には熊の様なネズミの様な形容し難い着グルミが置かれている。そして、叫び声を上げる事になった原因と思われるモノが端に捨て置かれていた。

「こ、これは！」
「し、死んでるんですか……？」

死体があった。服装からしてこのテーマパークの関係者の様だ。その死体は見る限りだと、包丁に白い紙を巻き、自らの腹を裂いている。時代劇や大河ドラマで見た事がある人は多いのではないだろうか。切腹だ。自殺に見えるその死体の傍らには遺書と思わしき書置きがある。『会社のお金を使い込んでしまいました。死んでお詫びします――――栗歩』

「……この図があるのでまだ安心はできないが、キラ事件と自殺の両面で捜査が進むだろうな」
「こ、今回は私　大丈夫なんですよね」

どこぞの少年探偵と同じように出かけ先で毎回事件が起こって、更に私達が怪しまれては困る。そう言った顔を浮かべ腕組みをする御剣は、「では、一体これは何なんだ」と奇怪な図の上に向かった。

「アトラクション等で使うものなのだろうか……」
「魔法陣からボン太くん参上！！　ってわけですね？」
「ミクモくん、『ボン太くん』とは何だろうか？」
「ボン太くんはボン太くんですよ。この着グルミの名前です」
「ボン太くんとは熊なのだろうか？　ネズミなのだろうか？」
「ボン太くんはボン太くんですってば～、やだな～御剣さんってば～」

その時、御剣が輝きだした。いや、地面だ御剣のいる地面が図を輝かせている。図はミクモが言った通りの魔法陣に見えるものだった。少し騒いでいる内に光は収まる。

「な、何だったのだ？」
「ビックリしましたよ～いきなり光り出すんですから～」

ズガンッと、一際大きな物音が真上からした。御剣が見上げるとそこには先ほどまで地面に置かれていた筈の着グルミ、ボン太くんが落ちてきていた。

「ふも～～～！」
「な、何だとーーー！？」

どすんっ！！

「グハッ！」
「み、御剣さん！　大丈夫ですか！？」

「ふもっふ～！」
「ぐ、ぐむむ……な、何なのだ一体……」
「ふも！　ふもふもふもっふ！」
「わっ！　ボン太くんが喋りましたね！」
「な、中に人が入ったと言うのか？　いや、この短時間では不可能だな。ここにあったスペアはどこに行ったのだ……」
「ふもふもっ！！」
「えぇいっ！　ふもふもだけでは分からぬ！！」
「ふもも……」
「え？　御剣さん分からないんですか？」
「わ、分かるとでも言うのかね？」
「多分ですけど、あ、もう一度良いですかボン太くん？」
「ふも！　ふも！　ふもふもふもっふ！　ふもふも……」
「『問おう、貴方が私の指揮官か。御剣と言う名前なのですね、落ちてきて失礼しました。イレギュラーな召喚によりまともに出て来られなかったのです……』って言ってます」
「うむ。……　……　……　……ますます分からん！！」

「失敗したようだな。安物の人形達では相手にもならんか」

金色の長い髪をした少女は、全ての人形の視界映像が途切れるの

を確認してリンクを完全に切った。先ほどまで見ていたのはバイクに跨る女を追いかけ回し、何体か破壊されたようだが、力尽きたかに見えた女から魔導書を奪えるかと言う直前でサーヴァントの召喚を許してしまったところだった。何のサーヴァントなのかは分からない。サーヴァントである以上、この少女の操る人形程度なら軽く倒せるだろう。しかし、その姿には疑問も残る。戦闘者の格好では無かったからだ。鎧を着ていたり、武器を持っているなら分かりやすいのだが、アレは何のサーヴァントか分からない。

ソファーに寝そべりながら冷静な頭を働かせている少女の下に一人の赤毛の青年がやって来た。

「駄目だったの……？」

「やはりお前の言うやり方には無理があるぞ。召喚させないようにするのは無理だ。恐らくこれでマスター全員、サーヴァント全員が揃った」

「そう……」

その少女に、「もう戦うしかない」と言われた青年は悲しげな表情で食事を運んできた。最初は「サーヴァントが食事して何になる。食費の無駄だ。一人で食べろ」と言われていたのが、今では……。

「……分かった食べるよ。お前はもう少しらしく出来んのか」と、割と言う事を聞く様になった。

「二人でいるのに一人で食べる何て味気ないしさ……エヴァ、美味しい？」

「あぁ、美味いな」

彼女の名前は『エヴァンジェリンA・K・マクダウェル』最強の悪の魔法使いと言う伝説が残る真祖の吸血鬼だ。今ではこの料理を振る舞っている青年のサーヴァントをしている。そして、この優男

風な青年は彼女のマスターで、『ナギ・スプリングフィールド』と言う。イギリスからの留学生である彼は、ひょんなことから聖杯戦争に巻き込まれてしまった。魔法を知らない善良な一市民だった。エヴァンジェリンの言う、『らしく』とは、彼女がこの世界に来る前に恋焦がれていた男と同姓同名だからに他ならない。

「でも、最初に出会った時はビックリしたな……」
「も、もう良いだろ！」
「凄くカワイイ子が外の蔵から出てきたと思ったら、いきなり掴みかかって来て噛みついて来るんだもん」
「わ、悪かったと言っているだろう。人違いだったんだからな……同じ人物の人違いだ。そんな事よりも。近いうちに戦闘が始まるぞ、この身に代えても守り切るが、相手の戦力が分からないからな、覚悟をしておけよ」
「え、エヴァ。そんな気が早いよ。こ、告白なんて……」
「だ、誰がそんな事を言った！」
「え、だって『この身に代えても』って……」
「う、う、うるさい！　もういらん！」

そこには最強で悪には見えない悪の魔法使いがいた。

01（後書き）

主人公：竜崎（りゅうざき）　唯（ゆい）
衛宮の魔術を使える？
サーヴァント：？？？（男）

マスター：御剣怜侍（マスター）＆　一条美雲一（通訳担当）
サーヴァント：？？？
真名：ボン太くん
……中身はマジでいない。

マスター：ナギ・スプリングフィールド（パラレル一般人）
サーヴァント：キャスター
真名：エヴァンジェリンA．K．マクダウェル
筋力：C　魔力：A＋　耐久：A　幸運：E　敏捷：C　宝具：C

宝具：人形使い（ドールマスター）
ランク：E～B
種別：対人宝具
レンジ：1～99
最大捕捉：300人
周囲3キロに渡って最大300体を同時に操れる。
英霊と化して、更に遠隔操作距離が伸びたと考えてーな。

02（前書き）

えーと、大好きなキャラ達ですが、
これは戦争なので、必ず誰かが死んじゃいます。

悲しいけど、これ、戦争なのよね。

今回はとりあえず、残りのキャラを出しちゃいます。
次回以降から主人公視点で書いて行きたいところです。

02

『優勝は武藤（むとう）　遊戯（ゆうぎ）！！』

歓声が会場内を包み込む。今回、大人気カードゲーム【デュエルモンスターズ】の大会が行われた会場には多くのデュエリスト、観覧者が詰めかけていた。カードを机の上でやり取りする戦いは、腕に装着されたデュエルディスクによる戦いへと変化していた。そして、ソリッドビジョンシステムにより立体化したモンスターや罠・魔法のカードを駆使して戦うカードゲームは大人気となり、今大会の優勝者である武藤遊戯は大会があるごとに優勝を掻っ攫っていた。

（やったね、もう一人の僕）

「あぁ、相棒の作ってくれたデッキは使いやすぜ……これは」

優勝したデッキを見ていた二重人格とも言える武藤遊戯は見慣れない、と言うよりも見た事が無いカードを自分のデッキの中から見つけた。

「『ホワイト・デビル・マジシャンガール』相棒、これは……」

（ぼ、僕も初めて見たよ）

彼のデッキには『ブラックマジシャン』や『ブラックマジシャンガール』と言う魔法使いのカードは入れているが、この白い魔法使いのカードは見た事が無かった。そして、デッキを組んだ遊戯も、それで戦った闇遊戯もその存在を初めて知った。他のモンスターカードとは違い、攻撃力などは書かれてないが、裏を見るとまた【デュエルモンスターズ】のものではない絵柄が書かれている。老いた魔法使いの様な長い髭を携えたローブ姿の男。手には杖と本が持た

されている。再び表を見ると細かく説明が書かれているのを見つけ、それを読み上げて行く武藤遊戯。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――」

（……何だろうね）

「分からない」と言いかけた瞬間。カードは魔法陣を描き光り出す。そのどこまでも真っ白に消し飛ばしてしまいそうな光は彼を包み込んでいた。やがて光は収束し、腕で視界を遮っていた遊戯は腕を下ろした。

「あなたが私のマスターですか？」

彼の目の前に現れた少女は白い制服の様な衣装を着ており、紅い宝玉を先端に付けた杖を持っている。茶色い髪のツインテール。小学生ぐらいだろうか。何とか冷静を保とうと分析をして、遊戯は目の前の少女の質問に返答した。

「俺はマスターって言う奴じゃないぜ。君は……」

「その手の刻印がマスターの証なんですけど……」

言われて自分の手の甲を見る。

そこには入れ墨の様な紅い刻印が浮かび上がっていた。

全国模試をまたもやトップで抜けた秀才。夜神（やがみ）　月（ライト）は家に帰るや否や部屋に篭っていた。先日手に入れた【デスノート】。人の名前を書けば殺せるというノートだった。そして、そのノートの最後に書かれていた――――【サーヴァントを召喚し、勝ち残った時、願いは叶う】――――これにより、ノートが本物だと分かった今、ライトは願いが叶うという点も本当の事だと思った。

そして、ライトはノートに書かれている僅かな手掛かりをパソコンで調べながら独り言を出す。

「契約、サーヴァント、聖杯戦争……どこにも情報なんてない。いや、でもここに書いてある霊脈とかは恐らくあの森の奥にある崩れかかった城の事だろう……」

ライトは何故か勉強よりもノート、ノートよりも聖杯戦争に惹かれていた。そして数日後。少しランニングに出てくると言って夕食後にライトは廃墟となった城に向けて走り出した。とは言っても城ではなく、森の中にある小屋に向かった。色々過去の歴史なども調べるうちに霊脈などの情報も分析したところ、森であれば8割方は霊脈で問題はなく、試すだけという興味本位からの行動のため、更に奥にある城まで行くのは億劫だったからである。

小屋に辿り着くと、この数日間で揃えた道具が揃っていた。校庭

に白線を引く石灰や、暗がりを照らす為の照明等がある。

「うわっ、蜘蛛の巣か……さっさと終わらせて帰るか。こんなノートのために、なんか馬鹿みたいだな……えーと———」

魔法陣の中には割と大きな蜘蛛が蠢いているが、照明に照らされても地面と同化する様に迷彩を保っている。そして、それが媒介と成り得た様で、召喚は成った。

「サーヴァント　セイバー、召喚に応じ参上仕りました。失礼ですが主のお名前を頂戴してもよろしいでしょうか」

ライトの目の前に現れたのは黒い制服を来た男だった。腰には刀と思わしきモノを差し、陰鬱なオーラを漂わせている。男を前にライトは最後の聖杯戦争に関する内容も本物だったノートに驚きながらも一瞬狂喜した。

「あぁ、すまない。僕の名前は夜神　月。セイバーって言ったら最優って言われてるサーヴァントだね」

「いえ、私はその様に言われるほどの者では……」

「真名って言ったっけ。あなたは何て言う英雄なのかな」

「私は、湊斗（みなと）　景明（かげあき）と申します。そして、誤解無き様に言わせて頂くと、私は決して英雄などではありません。お忘れ無きよう」

そう、それは反英雄とも言える男だった。

都心に新しく建った高層マンション。そこの最上階に住むのは人間ではなく妖怪だ。そう言う噂はたって無いが、事実ではある。何故妖怪が人間の住まいに住んでいるかと言えば住んでいる妖怪にも理由は分からない。何故なら彼女もいつの間にかそこにいたからである。妖怪は民族風の衣装に身を包み、帽子に付いた星には『龍』の文字が刻まれている。

「どうしてここにいるのか……昼寝をしていただけの筈なのに」

彼女の名前は紅（ほん）　美鈴（めいりん）。『くれない　みすず』ではないので気をつけてほしい。そんな彼女は先日、街をブラブラしていると教会で働いているというシスターに声をかけられた。

「戻りたいのであれば、勝ち残ればいいんですよ。これを差し上げましょう」

そう言って渡されたのは魔導書だった。元のいた世界でも似た様なものを主人が読んでいたので少しは理解が出来た。説明を聞くとどうやら【聖杯戦争】というものに勝ち残ると願いが叶えられるらしい。その為にはサーヴァントと呼ばれる存在を召喚しマスターとして自分以外の6人を倒さなければならないようだ。そこまで理解した彼女は本を流し読みながら溜め息をついた。

「でも、胡散臭い……というかカレー臭い人だったな～。でも他に方法は分からないし……戻れないなら戻れないでレミリア様も許し

てくれるよね」

そして数日後、魔導書に書かれている通りに環境が整っている場所を借りてサーヴァントを呼び出した。

「ランサーのサーヴァント。最速の名に恥じぬように駆け抜けるとしましょう」

「あ、よろしくお願いします。私の名前は紅　美鈴です」

「みすずさん」

「メイリンです！！」

「すみません。安心して下さい俺は世界最速の男です」

紫色のサングラスをかけた長身の男は自信を誇示して言い放った。自分は誰よりも速いと。その言葉に美鈴は鼓舞され、自分の手に浮かび上がった刻印を嬉しそうに眺めていた。

「私、帰れそうですご主人様」

ギフテッド。それは先天的に平均よりも顕著に高い能力を有している人間を指す。そして、彼もまたそうだった。高嶺（たかみね）　清麿（きよまろ）。ＩＱが１８０以上で頭が良過ぎる中学生。いわゆる天才だ。つい先日ま

で命がけの戦いを繰り広げていた彼は、戦友であり親友である魔物を思い出していた。

「ガッシュ……」

魔界の王を決めるための戦い。魔物１００人の中の一人にいたガッシュと言う金髪の少年。彼の情に篤い真っ直ぐな心は、清麿のかつては閉ざしていた心も開かせた。魔物にも人間と同じように良いヤツ、悪いヤツがいると知り、数多の戦いを超え、死にかけ、一歩、また一歩と進んだ。そんな事を思い出しつつ、目の前にある魔導書を清麿は冷めた目で見る。

「また魔界の石板とかじゃねーよな……」

父親から送られて来た魔導書と石板。それは解読は前回の様に魔界の文字で書かれていた訳ではないので難しくはないが、サーヴァントの召喚などと書かれていたり、聖杯戦争と書かれていたりする。そして、石板に至っては『石』というよりも氷の様に冷たく、カエルの様なものが描かれている。

「とりあえず、前回と同じようにやってみるか……」

清麿は前回、石板を手に入れた時、氷水に浸したり、ブリで叩いたり、マジックペンで落書きしたりした。それを思い出すかのように同じ事をして行く。そして、落書きが終わったあたりで清麿はその結果を思い出した。

「これって、あとで復活した時に怒られたんだよな……」

しかし、やってしまったモノは仕方が無いと思いつつ、願いも無

く彼は魔導書を読み上げる事にした。そして、高嶺家の清麿の部屋は眩く光だした。光が収まると、そこには少女が立っていた。

「最強ー！！」

「……何だ？」

白いシャツの上に青いワンピース。首元の赤いリボンが良いアクセントになっている。そして、水色の髪に青いリボン。不思議なのは背中に見える氷の様な透明な羽だ。どうやら召喚は成功したらしいが、この少女はサーヴァントで言うところの何なのだろうか。

「あたいを召喚するなんて分かってるじゃない！　あたいの名前はチルノ！　サーヴァントで言うとバーサーカー！　あたいってば最強ー！！」

「……バーサーカー？」

清麿の記憶違いでなければ、先ほどの魔導書によると、バーサーカーと言うクラスはステータスが低い英霊を英霊の理性とマスターの多大な負担を引き換えに強化する枠である。そう、清麿の記憶は正しい。では、理性を失わずここに召喚成功したサーヴァントは何者なのか。

「ち、チルノは何の英雄なんだ？」

「あたいの凄さを知りたいの？　しょーがないなー！　あたいは氷の妖精！　『冷気を操る程度の能力』を持ってるんだぞ！」

清麿はチルノが召喚されてから立った今の会話までで全てを理解した。この子は――――アホな子なのだと。恐らく石板が消えていることから魔力媒介として消えたのだろう。そして、色々とやったから召喚も不完全でバーサーカーとしても不完全で失敗してしまった

のだろう。狂化される筈が、ベクトルが違う方向に狂っただけでサーヴァントとしては期待できないかもしれない。

「ちょ、ちょっと！　あたいの名前聞いておいて自分は名乗らないのか！？」

「高嶺清麿だ。マスターって柄じゃないからな。清麿って呼べ」

「キヨマロ……変な名前ぇ！　あはははは～！」

「うっさいわバカ！」

「何ぃ！　バカって言った方がバカなんだぞ！　このバカ！！」

そんな馬鹿らしいやり取りに、ふっと清麿は笑った。馬鹿にしたからではなく、それは少し前に何度も味わっていた幸せな時間が帰って来たような気分だったからだ。清麿はチルノの頭に手をポンと置き言った。

「まだ全部は理解してないけどな、勝とうぜチルノ」

「お……その……キヨマロは……っ恥ずかしいな！　恥ずかしいぞ！」

02（後書き）

感想は随時受付中です。

明らかにセイバーが反則です。
今回の第2回の中で一番まともに殺しちゃう系の人だねw

サーヴァント：???
真名：???
マスター：武藤遊戯（ファラオ）

セイバー
真名：湊斗景明
マスター：夜神月

ランサー
真名：???
マスター：紅　美鈴
騎乗スキル・単独行動

バーサーカー
真名：チルノ

マスター：高嶺清麿

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9215u/

聖杯戦争 the Parallel

2011年11月21日21時39分発行